

## 患者が看護師を避ける要因 - 緩和ケアチームに依頼があった一事例の 考察から -

北島昌樹<sup>1)</sup>、水戸部優太<sup>1)</sup>、森下慎一郎<sup>2)</sup>

1) 新潟医療福祉大学 健康科学部 看護学科

2) 新潟医療福祉大学 医療技術学部 理学療法学科

**【背景】**K 氏 30 歳代女性。夫と別れて実父母と K 氏の子どももと 4 人暮らし。20XX 年 2 月に左乳がん（腺がん）で乳房全摘、術後化学療法を行った。しかし、20XX+1 年 12 月に手術部位に再発が見つかった。在宅では頭痛や恶心があり、昼夜問わずに何度も病院に訪ねてきた。K 氏は担当医にその度、説明を何度も求めたり外来看護師に「また来てもいいですか」と頻回に通う状態であった。担当医は、「頭痛や恶心は、がんの症状と関係がない」と伝え K 氏を遠ざけるようになった。また、外来看護師も対応が困難であると考えるようになり K 氏に対して意識的に接する機会を持たないよう避けていた。

その後、入院化学療法になったが表情乏しく感情の表出が少なくなり、恶心、嘔吐の副作用症状が現れても我慢する傾向にあった。病棟看護師は K 氏を気遣う声掛けなど行っていたが、反応はなく看護師も困惑していき K 氏を遠ざけるようになった。そのため、病棟看護師長よりスタッフが接し方に困惑していると緩和ケアチームに介入依頼がきた。なお、K 氏の予測予後は、化学療法の効果が PD であった場合では約 6 カ月であった。

**【目的】** それまでの K 氏と医療者との関わりでマイナス因子となるものを把握し、K 氏に対する医療スタッフの適切な関わり方を明確化することを目的とした。

また、PD の場合に K 氏の悔いが残らないように、入院を機に K 氏の母親としての役割喪失に対してのケアを行うこととした。

### 【方法】現象学的質的事例検討

**【倫理的配慮】**Z 病院倫理委員会の承認、また K 氏に学会等での発表を行うことの承諾を得た。

**【結果・考察】** まず、K 氏と面談を行った。「毎日が不安でどうがなかった」と不安が大きかったこと、また、誰かに頼りたかったことを表出した。離婚して子どもを一人で育てていること、そして、この先、子どものことが心配であることが表出された。医療スタッフに関しては外来通院時に「何か冷たくされているような感じで」と K 氏も認識していた。そのため入院を機にあまり自己を表出しないほうが良いと K 氏は感じてスタッフを遠ざけていたと考えられた。これらより、K 氏の感情を受け止める支援、

頻繁に声をかけて K 氏に関心を寄せていることを示すようにと病棟看護師に統一したケアを提供できるように促した。

病棟看護師の感情の表出の促しや環境の整備によって、徐々に率直に思いを表出するようになり、「私が頑張らないと子どももかわいそう」「がんになって人間性を再確認できてより良い人生になった」と前向きな気持ちが表れるようになった。また、化学療法の副作用症状である恶心を我慢せずに述べられるようになり、制吐剤の使用が定期的に行われて、恶心が解消できた。子どものことに関しては「私が独りで育てなきやいけないと思っていた。私の父母にも協力してもらえることは今からやっておかなきやね」と状態が悪化しても頼れる存在があることを K 氏自身が実感できた。

病棟看護師に対しては、医療スタッフの A 氏への拒否的な姿勢が A 氏の医療スタッフへの信頼の喪失につながったことを説明した。そこで、それまでの過程から看護師が自ら気付けるよう、外来看護師を交えたカンファレンスを行った。その結果、訴えの多い A 氏から看護師は、自ずと遠ざけてしまう自身に対して再確認することを促すことができた。そのため、カンファレンスでは看護師同士が話し合い、傾聴の環境を整え統一した接し方を行う方向性となった。その後、看護師と K 氏との関係性が密になっていった。その結果、K 氏からの思いの表出を受けてケアプランを立案することができるようになった。

その後、K 氏は一時退院して、家族と在宅で過ごすことが出来た。K 氏は、外来通院時に笑顔で病棟に挨拶する姿があった。K 氏も外来看護師に以前のように戸惑うことなく接することが出来た。外来・病棟看護師のカンファレンスを行ったことで統一したケアプランが立案でき、継続看護も有用性があったと考える。

K 氏に対する化学療法の効果が乏しく、退院後 7 カ月で再入院することとなった。看護師は、自発的にケアプランに「母親としての役割喪失に対する看護」を挙げ、実行していた。そのケアの中で家族が病室を不在にしている際に、看護師に「母親として出来る限りのことはしたつもり」と言動がみられた。その数日後、安らかに息を引き取った。

**【結論】** 医療スタッフが K 氏を遠ざける姿は、逆に K 氏から医療スタッフを遠ざけた。それは、化学療法の副作用に対するセルフコントロール不良や潜在する問題を抽出できないことに結びつく。そのため、まず、医療スタッフは患者の言動の背景も読み取り、心の声を聴く能力が求められる。